

えでぴあ

立川と語ろう 立川に生きよう

July 2017

Écoutez Bien Vol.35 No.392

7

最終回は復興支援



表紙の人／入船茶屋三代（柴崎町）

続・砂川深層 ⑦

あれから54年、立川と砂川合併のお話[3]

案内人：豊泉喜一氏

昭和40年代から増えてきた大型集合住宅

全国各地で行われた合併協議の中でしばしば問題になる合併後の新しい市名については、協定書第一条に合併の期日及び形態に「昭和38年5月1日より北多摩郡砂川町を廃し、その区域を立川市に編入する」とあり、およそ2倍の面積を持つ砂川町が、大きさが半分の立川市に飲み込まれた形になっている。「立砂市」という案も出たようだが、立川の「立」と砂川の「川」を合わせれば「立川」になるので、変えないでもよいのではないかと納得したという説もある。

立川と砂川の合併が順調に進んだ理由には、ひとつに昔から「停車場」といわれた立川駅周辺に砂川出身の人達が多く住んでおり、親近感や人的交流が多かったこと。また、立川市に隣接する住宅地域の自治会を中心に合併運動が行われていたことも要因として挙げられる。後に、当時立川市議会で重鎮といわれてきた志村真次郎氏も、回顧録「立川に生きて」の中で住民主導で合併が進められた経過を語っている。更にこの頃から砂川地区には住宅公団、都営住宅など大型の集合住宅が次々に建設され、立川市内に比べ遅れていた学校施設や下水道の早期実現等、住民から都市施設整備の強い要望があった。

前号で触れた住民アンケートの結果をみると、農村部の砂川西部は合併に反対が多く、東部と南部の住宅区域は圧倒的に賛成が多い。

地域	賛成	反対	白票無効	総数
西砂～4 番組	366	393	33	793
5 番組～10 番組	452	201	16	750
南砂川	205	61	4	270
住宅地域	1089	447	68	1606
合計	2175	1242	111	3541

(合併賛否アンケート集計結果、賛成61.42%、反対36.35%)

合併から半世紀余りが過ぎ、合併時18,485人であった砂川地区の人口は今年3月現在10万人を超えたのに対し、旧市内は8万1千人余りと逆転している。昭和50年第11代岸中市長以来、青木、清水市長と三代40年以上に亘り、砂川在住または出身者が市長を務め、今や立川と砂川が融合、多摩の中核都市として役割を担う町になった。合併の6年前の昭和32年に作られた立川市民歌に、市域としてはとても「大立川」とはいえない広さなのに、3節ある各節ごとに「大立川の朝ひらく」「大立川は伸びてゆく」「大立川に栄えあれ」と謳われているが、今は名実ともに「大立川」に相応しい町になったのではなかろうか。



所沢街道（都道55号線）沿いがまだ草むらだったころ（日産工場建設前）



所沢街道沿いに高層住宅が立ち始める（日産の工場建設後）



所沢街道沿いの現在の様子

いずれも「今昔写真集 たちかわより」

祈りと救い、

「能」による復興支援

平成23年には『隅田川』や『井筒』を通して能の普遍的な魅力を語ってくれた。
今回は、復曲『名取ノ老女』に込めた祈りと救いがテーマ。

復曲までの経緯

昔あった曲で今は上演されていないものを復活上演することを復曲といいます。国立能楽堂では平成28年3月に『名取ノ老女』という能を復曲しました。なぜ『名取ノ老女』なのか、ということですが、東日本大震災後、国立能楽堂は「企画公演 復興と文化」として平成24年から能を一番上演してきました。平成28年は被災5年目に当る年なので、ひとつの区切りとして被災地と関係する『名取ノ老女』を復曲しようということになり、私に話が合ったのです。名取という土地は仙台の少し東側にあって、大震災の時にはずいぶん悲惨な映像が流れました。仙台空港にも津波が押し寄せて、いろいろなものを飲み込み覆い尽くしました。私はその画面を目の当たりにして、近くの名取も相当に被災したのではないかと心配しました。実際に被害はひどくて、閑上地区にあった住宅地はほぼ全滅、多くの方々が犠牲となりました。そのこともあって、国立能楽堂ではこの『名取ノ老女』を復活したいと思ったのです。

私のところにその話が来たのは、まだ国文研の助手をしていた昭和57年、研究紀要に「名取老女熊野勸請説話考」というこの能と関係する論文を発表しており、それを国立能楽堂の方が読んでいて、小林に手を貸してもらおうということになったようです。復曲というのは1年くらいで簡単にできるものではありません。話は3年くらい前に企画して、そこから元になる台本の選定や台本作りをして、ようやく昨年、人間国宝の梅若玄祥さんと大槻文藏さんをシテにして復曲上演した、ということなのです。

『名取ノ老女』の物語

この『名取ノ老女』という能は、熊野の山伏が榊の葉に虫食いであらわれた熊野権現の神詠を名取の老女に届けるという話です。名取の

老女は熊野権現をととても深く信仰していました。毎年のように名取の地から紀州の熊野まで、熊野詣でをするわけです。院政時代から鎌倉時代の始めにかけて、「蟻の熊野詣」と言われたように、熊野信仰はすごく流行したのですね。でも大変ですよ、今は新幹線や飛行機がありますが、当時は歩いていくわけですから。

この話がおもしろいのは、主人公が老女—女性だということです。昔の山岳信仰は女人禁制なのに、熊野は女性の信仰を許していた。女性に対して寛容な神様でした。ですから女性の信仰が高まるわけで、その象徴的な存在がこの名取の老女なのです。この能は、ある時名取の老女のもとに紀州の山伏が訪ねてくる。ところから始まります。老女は尋ねます。「あなたはなぜ私のところに来たのか」と。山伏は応えます。「私が本宮證誠殿に詣でたところ、神様から霊夢——ありがたい夢のお告げ——をこうむった。もしお前が奥州に行くのなら、名取の老女にこの榊の葉を渡してほしい」と。榊は熊野の神木なのですね。常緑のつやつやした葉で、葉脈がきれいに縦に走っています。葉脈が縦にあるということは切れづらい。だから神木として尊ばれているわけです。その葉にご神詠が虫食いで書かれていました。それを山伏が名取に届けに来て、もらった老女は大変喜び、老眼なので詠みあげてもらうのです。『道遠し年もやうやう老いにけり思ひおこせよ我も忘れじ』——熊野と名取は遠く離れている。お前もずいぶん年をとったなあ。熊野に詣でられなくなっても、時々は思い出してくれよ、私もお前のことは忘れないよ、という意味なんですね。自分は老いてもう熊野に詣でられないが、熊野の神はちゃんとご存知で、今でも私のことを思ってくれていると老女は感激するわけです。そこで山伏に、名取に熊野三社を祀ったことを話し、案内をします。これが本宮、これが新宮、これが那智とめぐりながら説明するのです。

そして臨時の幣帛をささげると、熊野権現がそれに応じて熊野権現の使わしめの護法善神を飛来させます。さっそうと飛んで来て老女を祝福し、お前のことは忘れないよ、これからも見守っていくよと言って去っていく。

名取の老女の祈り、それに応えた熊野権現の救い、それがテーマの能だと言えます。

復曲にあたり

この能は15世紀からあるもので、古い台本が残されています。今回の復曲に際しては天文23(1554)年の奥書を有する古謡本である観世元頼本をもとにして、私と小田幸子さん(能狂言研究家)のふたりで台本を作り直しました。このお話をいただいて、台本に手をつけるようになったのは2年くらい前からで、1年かけて作ったものを国立能楽堂の方に見てもらってダメ出しをくらい(笑)、さらに直したものをシテを演じてくださる梅若玄祥さん、大槻文藏さんに見てもらうと、そこで、まだ長いとか、ここがわかりづらいとか指摘され、さらに手を加えて練り上げたんです。台本作りのポイントはいくつかありましたが、特に強調したのは、名取が舞台だということを復曲の台本にはっきり入れようということでした。元頼本を元にして台本を作っている時に「あ、もしかしたらこの台本は名取を知らない人が書いたのかもしれない、中央の能役者が作った可能性があるな」と感じました。というのも、名取にちなんだ地名が出てこない。つまり、都にいる人が「道遠し」の神詠と、名取に熊野三山が勧請されていることを知っていれば、あとは作れるものなのです。そこで小田さんと私はあえて名取にちなんだ地名を入れました。老女が山伏に、勧請した熊野三山を案内するシーンでは、まったく季節感のなかったところを「あらやさしの景色やな、雪間を分けて萌え出づる、若草待てる風情なり」として早春に設定し、そのシーンの中で高館山を廻り

小林健二氏

国文学研究資料館 副館長・教授。専門は室町期文芸(能・狂言・幸若舞曲・お伽草子など)の研究。国立能楽堂を始めさまざまな能舞台で講演や解説をされている。小林先生が語ると、本当に能を観に行きたくなくなるから不思議だ。

ながら三社を順次紹介する「名所教エ」の形にしました。「さてあれに流るるは名取川候ふか」というセリフには、『陸奥にありといふなる名取川』と壬生忠岑の歌を少し入れ、その後に山伏が「川下に見ゆる浜の名は」と聞くことに応えて「あれこそ閑上」と閑上の地名を入れたんです。熊野三山で那智が一番山の上にあるんですね。そこから見る閑上の浜。今では大震災でもう何もなくなくなっちゃっているんですけどね、そこにはかつて人々の営みがありました。ですから、鎮魂の気持ちを込めてこの閑上の地名は入れたいと思いました。そして「あれこそ閑上の浜、忝くも那智のご本尊は、かの浜にゆりあげられたる観音にて候」と、土地の伝承を織り込みました。浜で漁師が網を打っていたら観音さまが浮かんできた。観音様がゆりあげられてきたので閑上という地名になった。その観音様が那智の本尊になったという伝承です。今でも通用する、いや今だからこそ通用するというものを作って上演しました。

台本を作った私や小田さんはもちろんですが、演じられた梅若玄祥さんや大槻文藏さんなどお忙しい方々も名取を訪れ、今は全部流されてしまっても何もない現状を見て、やはり感じるものがあつたようで、これは鎮魂の能として演じたいという気持ちになったようです。

人のために役にたつ それが嬉しかった

復曲の台本を作る時、私の案が採用されたところに〈クセ〉があります。この能の〈クセ〉は熊野権現の威徳を語っていますが、大きく作り変えました。それまでは抽象的、観念的に熊野権現はすごい!とだけ語っていたのを、復曲の台本では室町時代の『熊野権現縁起』をとり入れました。天竺(インド)のマカダ国の善財王には1000人の后がいて、末の後の五衰殿女御にだけ王子ができるのですが、そのことで妬ま



れ深山で首をはねられてしまう。けれども王子は獣に育てられ成長し、虫食いの神詠によって叔父の上人に見出され父王と会い、母である女御も蘇生するんですね。マカダ国を飛び立った一行は熊野に到着し、熊野三山となったという話です。熊野権現が女性や子供など弱い立場の人々を救う神だということを、この物語を借りて言いたかったのです。

私がこの能を研究したのは30年も前のことです。研究というのは自分のためにやっていますが、何か人の役に立てばもっとよいと思っています。ですから、こうして30年後の復曲の役に立つということは嬉しかった。今年7月28日にまた国立能楽堂で上演されます。そして10月1日には地元の名取でも上演されることになりました。去年の春に国立能楽堂で上演した時、市長を始め多くの方が来て、ぜひ名取で

もやりたいということになったんですね。能というのは5年前のインタビューでご紹介した『井筒』とか『隅田川』のような古典的な名曲を繰り返し上演して、普遍的な魅力を鑑賞するというものもありますし、今回の『名取ノ老女』のように、今の時代に何かを訴えかけるものもあります。今回は祈りと救い、鎮魂がテーマになりました。名取で上演して、皆さんがまた元氣を取りもどしてくれればうれしいですね。

『名取ノ老女』にみるように、中世の人々の営みは、神仏に対する祈りと救いに溢れていました。その一端を知ってもらうため、国文研では来年の秋に、名古屋大学などと連携して特別展示「(いのり)と(くすい)の中世」を開催する予定です。たくさんの方に見ていただきたいと思っています。

出水期を前に「熱い訓練」

平成29年度三市二署合同総合水防訓練

東京消防庁、立川市、昭島市、国立市の消防団員、市役所職員、警察機関及び地域住民が参加した実戦的水防訓練が行われた。

中洲に取り残された人の救助に向かう



平成29年5月21日、真夏日になった日曜日。多摩川左岸の河川敷で、東京消防庁及び水防管理団体（立川市、昭島市、国立市）と関係機関が連携した『平成29年度三市二署合同総合水防訓練』が行われた。水防管理者は清水庄平立川市長、統裁者は増田哲生立川消防署長、統括指揮者は比留間久雄立川消防署警防課長。関係機関として立川消友会、立川市民消火隊、立川女性防火の会、国立女性防火の会、立川消防少年団、災害時支援ボランティア、立川・国立自主防災組織、立川市建設業協会、警視庁立川警察署、計250名が参加した。クライマックスは、多摩川の中洲に取り残された人の救出。これから迎える集中豪雨や台風の季節を前に、実戦的訓練となった。

多摩川は山梨県甲州市塩山にある標高1953mの笠取山を源流とし、途中多くの支流を束ねながら全長138kmを流れ東京湾に流れ込む。市民生活に直結した川ではあるが、過去においてはしばしば大洪水をおこし周辺住民の生活を脅かす存在でもあった。昭和49年9月1日に東京地方を直撃した台風16号では堤防が決壊。流出した家屋は18戸に及んだ。平成28年8月の台風9号は避難判断水位7.6mに迫る7.2mを記録し、立川市においても水災が発生した。気象庁と国土交通省では洪水予報の対象河川を全国で80河川指定しており、都内では荒川、江戸川、多摩川の3つの水系が指定されている。

水防活動はひとつの消防署、ひとつの消防団だけで対処できるものではなく、防災関係機関、防災関係組織全体で取り組むもの。油断は禁物、こうした訓練がとても大事になってくる。少年少女も、女性のみなさんも、年配の方々も、顔から体から汗が流れ落ちる暑い中での訓練だったが、命を守る、財産を守る、街を守る連携はすばらしかった！



土のうの代わりになるもの（ポリタンクやプランターなど）を使っでの訓練



鋼板防護工法



改良積土の工法



立川市長らによる点検の様子

えくてびあんの輪	
えくてびあんはリストのお店にあります。 今月は 栄町・高松町・曙町 のお店です。	
栄町 手作りパン工房 Bonheur ～ボヌール～ 536-3207 FUKUSHIMAYA 立川店 534-1700 相模屋酒店 536-2476 メンズカット ヤザワ 536-8738 大型コインランドリー マンマチャオ栄町店	
高松町 ルーデンス食堂 丸助青果店 522-3542 米穀・食料品 横町屋 522-2609 中華料理店 太幸苑 527-0906 セイロン風カリリー シギリア 507-2418 ふじ整体院 540-9155 ライブハウス Crazy JAM 529-9507 ライブ喫茶 炭火煎珈琲 はるもにあ 521-2959 立川湯屋敷 梅の湯 522-3800 ヘアーサロン イトウ 522-6281 立川伊勢屋 本店 522-3793 書籍・雑誌 フレンド書房 527-1555 大野サイクル 523-2061 パンのお店 Dragee ドラジェ 525-2730 立川キリスト教会 526-6826 サロン・ケベクア美容室 527-4716 HAIR MAKES たしろ 525-2175	
曙町 うなぎ しら澤 524-5061 中華料理 福心楼 524-2343 久住ハウジング(株) 527-8007 不動産 大晋商事 525-3110 ヤマミュージックアベニュー立川 523-1431 蕎麦懷石 無庵 524-0512 TABACCONIST ゼフィルス 524-0514 ブティック ASHUTE VENI-VENI 521-1481 ビストロ シェ・タスケ 527-5959 あら井館総本店 522-2957 大衆劇場 立川けやき座 512-5057 立川伊勢屋 ルミネ店 524-3395 たましん すまいるプラザ立川 0120-667-646 オリオン書房 ルミネ立川店 527-2311 みずほ銀行 立川支店 524-3121 コスメドール 辰己屋 524-6051 エミリーフローグ 本店 527-1138 カフェ クリムト 526-3030 黒毛和牛専門店 焼肉 FUKI 523-0166 宮地楽器 MUSIC JOY 立川北 527-6888 TAKE THE HONEY スイーツ 523-8200 三井住友銀行 立川支店 522-2151 レストラン サヴィニ 525-1662 立川献血ルーム 527-1140 アートルーム 新紀元 528-6952 MOTHERS ORIENTAL 528-0855 たましん 本店 526-7700 和食どころ 若草茶屋 526-0010 三上鯉節店 522-3259 エフエムたちかわ 524-0844 ラ・フランス 529-5522 ビックカメラ 立川店 548-1111 Charcoal Dining るもん 527-3022 酒亭 玉河 522-2654 三菱東京 UFJ 銀行 立川支店 524-4121 玉屋 KITCHEN 595-7847 立川グランドホテル 525-1405 カフェ アバン 527-4479	

jorakugajo

真如苑提供番組「常楽我淨」

スカパー！：529ch

スカパー！で放送の常楽我淨はスマートフォンアプリ「ivy」（無料）で視聴できます。

J:COM 多摩：111ch

放送時間については番組表をご確認ください。

www.shinnyo-en.or.jp

街の話題

キッズドリームチャレンジに今年も参加します！

立川青年会議所が主催する「キッズドリームチャレンジ」は職業体験を通して子どもたちに自己肯定感を持ってもらうという企画。今年で4回目になります。えくてびあんでは毎年「ジャーナリスト」というくくりでご協力させていただいています。今回は子どもたちが国立研究機関のトップインタビューに挑戦！ とうなることやらハラハラですが、大物の胸を借りて成長してもらいたいと思います。打ち合わせにうかがった統計数理研究所では、樋口知之所長から「職業体験といいながら、10年後にはもう無くなっているであろう職業が2つもありますね」と目からうるこのご指摘！ 人工知能の時代は確実にそこまでやってきています。だからこそ「キッズ」企画、研究機関を抱える立川ならではの企画です。ご期待ください。立川青年会議所が開催する「キッズドリームチャレンジ発表会」は9月17日（日）サンサンロードで。

タテカワ

立川寸志さん、里帰り公演

5月7日（日）、リスルホール小ホールで立川寸志さんの里帰り落語会が行われました。会場は満席。お馴染みのお客さまも多かったようですが、今回初めてとおっしゃる方も。立川生まれの立川育ち、立川高校出身です。里帰り落語会、今回は4回目ですが、昨年秋からこの小ホールは満員御礼。地元立川で落語を披露する機会も多くなったそうです。「粗忽の使者」「幫間腹」そして「死神」の三席。最後の「死神」は落語の域を超えていたのかいいないのか、なんだか凄みさえ感じました。次回も本当に楽しみにしています。

『立川小唄』の記念碑建ちました

5月14日（日）薄曇りのお天気でしたが、まさに立川飛行場の入口だったその場所に、立川が空の都だったことを証す記念碑が建ち、八王子芸妓の皆さんにより『立川小唄』が復曲、艶やかな踊りが披露されました。「軍都」になる前、民間機が上空を飛んでいた東京の空の玄関、立川飛行場を唄ったものです。「空の都よ 立川よ」の歌詞と飛行機の姿を取り入れた踊りは、飛行機で賑わった往時を偲ばせます。

記念碑の表

国図研 ロバート キャンベル館長と

極地研 白石和行所長と

統数研 樋口知之所長と

除幕式の様子

飛行機のように踊る芸妓のみなさん

杉浦章さんと裕美子さん

お店の名前もシェフも変わりました

立川駅南口柴崎町2丁目にあった「ビストロすぎ浦」が、4月から「ビストロこづ」になっています。1989年1月からこの場所でレストランを開業していた「ビストロすぎ浦」の杉浦章さん。29周年を迎えた今年、人生の一区切り。元気なうちに第二の人生へ踏み出すことにしたのだとか。スーシェフとして一緒に働いてこられた古積健二さんがこれからは自分のお店として切り盛りします。6月からは本格的に古積さんのオリジナルメニューになっていきます。今号のお店のコーナー〈おじゃまします〉でも、そのお料理を一部ご紹介。ベテランご夫婦も若いご夫婦も新しい挑戦です。どちらも頑張ってください～！

夏はやっぱりプールですよ！

国営昭和記念公園レインボープールの季節になりました！ 例年通り、えくてびあんでは10組20名様にペア招待券をプレゼント。招待券の有効期限は平成29年9月3日（日）まで。但し8月13日～8月15日の間のご利用になれません。ペア招待券ご希望の方は、ハガキに住所、氏名、連絡先をご記入の上、〒190-0023 立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4階 月刊えくてびあん レインボープール招待券プレゼント係までお送りください。応募締切は7月18日（火）必着。応募多数の場合は抽選、招待券の発送をもって当選とさせていただきます。

おじゃましま～す！——[56]

ビストロ こづ

気軽に入って気軽に楽しめるフレンチ。でもお味は本格派です。しかも古典フレンチを食べやすくというコンセプトが いいじゃないですか！ 今ときはフランスでもライトフレンチが好まれるそうですが、本格的な和食が素晴らしいように、本物フレンチはやっぱりすばらしい。だいたい豚の頭を丸ごと煮る料理なんて、他でたべられないですよね！ ということで、こづさん、今日は「桜姫鶏のテリーヌ」を。アラカルトでも注文できますし、コースなら前菜としていろいろあるテリーヌからひとつ選べます。充分な食べごたえ。1枚の中にいろいろな食感と味が混ざっています。それをナッツのドレッシング和えを添えていただくと、また別の味に変化します。このテリーヌ各種、どれもワインに合うようにと工夫されています。ワイン好きにはたまりませ～ん。こづさんのお店はデザートも特別おいしい。パティシエではなくキュージニエですけれど、以前からバレンタインデーの前にはお菓子の教室を開いていたように、デザートが得意なのです。黒粒胡椒入りのガトーショコラも、キャラメルのアイスクリューもライチ風味のグレープフルーツシャーベットもみんなみんな大好きです。こづさん、これからどうぞご最員に！

デザートの盛り合わせ

桜姫鶏のテリーヌ

古積健二さんと香織さん

表紙の人

小澤綾子さん、清富さん、拓海さん、郁実さん（後列左）

創業は昭和26年。清富さんのお祖父さん、小澤清武さんが初代です。立川駅南口にお寿司屋さんと関西割烹のお店を持って、「入船」と言ったら知らない人はいない有名店。こちらで修行した職人さんも大勢いらっしゃいます。二代目の武宣さんは南口の商店街をひとつにまとめた実力者。おかみさんの綾子さんとご夫妻で、多くの方の縁結び、仲人を務められたのだとか。清富さんには3人のお子さんがいらして、21歳のお嬢さん、大学2年の拓海さん、高校2年の郁実さん。長男の拓海さんは中高一貫校の社会科の先生になりたいそうです。じゃ、お店は郁実くん？「僕が継ぎますねえ」と即答。「でも、私も先生になりたかったの」とおかみさん。「僕も先生になりたかったのよ」と清富さん。代々の夢は拓海さんが叶えて、現実のお店は郁実さんが。すばらしい絆の連携って感じです。さて、7月号。夏です。うなぎの季節です。おいしいうなぎは入船茶屋さんで、どうぞ！

かたこと

◆真夏が増える6月。立川にもビーチがあるのをご存知ですか？ GWからプレオープンしている〈タチビーチ〉が7月17日、海の日にグランドオープンします。白い砂浜は本物のビーチのよう。お子さん連れのご家族や、BBQが大好きという若い人たちに人気です。BBQの達人女子たちのお隣で、全然炭をおこせない男子チーム。たかがBBQ、されどBBQ。当世事情が見えてきます◆14回を迎えた立川フレイメンコを皮切りに、5月の立川は本当に賑やかでした。立川いったい音楽まつりは市内のいたるところをステージに、しかも年々その技術レベルがアップして、聴く方も演じる方も楽しいお祭りになっていました◆来年2月着工のみどり地区。今秋、流鏑馬が行われます。それを前にヤギたちが一生懸命除草任務を遂行しています。5月に生まれた赤ちゃんヤギの名前を公募、「わたげ」と決まりました。白くてふわふわ。ピッタリの名前です。お母さんとじゃれる姿がとてかわいいい。来年はこでもうヤギの姿を見られないのかと思うときびしいですね◆読者の方から「えくてびあんの表紙が好き」とありがたいお言葉を頂戴しました。「立川で三代」のモデル探しには苦労しますが、「毎回楽しみ」というお声をいただくと、やはり嬉しい。定期刊行物ですから、毎月発行されて当たり前。その当たり前に気が付いて、黙って手にしてくださるお姿も励ましのひとつです。今月も取材に応じてくださってありがとうございます。そして読んでくださって感謝です。また今月も頑張ります！えくてびあんスタッフ一同

えくてびあん ㊄

7月号 第35巻 通巻392号

平成29年7月1日発行
発行 有限会社えくてびあん
〒190-0023
東京都立川市柴崎町2-1-10 高島ビル4F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
E-mail message@tamatebakonet.jp
URL http://www.tamatebakonet.jp
発行人 黒須 環
企画・写真・編集 えくてびあん編集スタッフ
デザイン 池田隆男（WATER DESIGN ASSOCIATES）
印刷 三浦印刷株式会社・DECK C.C.

無断転載を禁じます。

6 Écoutez Bien July 2017 No.392

Écoutez Bien July 2017 No.392 7



作ってみました『江戸ご飯』——「最終回」

とりのこいみ

鳥煮込卵とすり流し豆腐

国文学研究資料館所蔵の江戸時代の料理本に書かれてあるレシピを『江戸料理レシピデータセット』として公開、それが現代語になってレシピサイトへクックパッド（江戸ご飯）に掲載されています。そこから今月は「鳥煮込卵」と「すり流し豆腐」をご紹介します。

『万宝料理秘密箱 玉子百珍』にある「鳥煮込卵」。本来は小鴨か鴨か鳩を使うようです。ここでは鶏の胸肉を使いました。レシピの分量が全部「適量」、それがかえつてむずかしい。麻糸で縫い合わせるとありましたが、そこは現代。ラップで巻いたり、楊枝で留めたり、別の方法でもできるようです。いずれにしてもゆで卵を肉の中に適量入れて蒸した料理。とつてもさうばりして、冷めてもおいしくお酒のアテにもいいようです。一方、すり流し豆腐はといえば、こちらは二日酔いにもつてこい！葛でとろみのついた豆腐がおなかに優しく、お味噌の香りが懐かしい。絹ごし豆腐と葛粉を合わせてすり鉢で形がなくなるまですります。だし汁に味噌を溶かしてそこに豆腐を入れていきます。絹ごし豆腐そのままよりも、もっとやさしく温かい。豆腐レシピの出典は『豆腐百珍』です。

このシリーズ、今回が最終回になりますが、江戸のお料理はとてもシンプル。調味料でごまかさない、本当にぜいたくなお味に毎回感動した連載でした。みなさんも、江戸ご飯、チャレンジしてみたいかがでしょうか？ 試食に行きたいというお声をたくさんいただきました。そういう機会をいつか作れるといいなと思いつつ、とりあえずおしまいです。